

グリーフケアの基本

早いもので、4月も第二主日となりました。2024年度に入ってから、2週間が経過したわけです。子どもたちも新しい年度の生活が始まっていることと思います。東京府中教会でも新しい年度の歩みが始まっていきまして、来週は教会総会が予定されています。「教会総会」と言えば何とも堅苦しい感じがして、気後れする人もおられるかもしれません。しかし教会もこの世の組織であるからには、2023年度をしっかりと振り返り、今年度の宣教計画や経済的な運営のことを検討しなければならないのです。当日はただただ窮屈な重苦しい会議にするのではなくて、神様の御声に聞き、祈りをもって議事を進めていきたいと考えています。そして何よりも、「互いの心が内に燃える」ような経験を分かち合う年度の出発の時としたいと考えております。今年度も主のご復活の恵みにふさわしく歩んでいくために、有意義な話し合いの時を持ちましょう。来週は教会員の皆様のご出席を、またどうしても欠席される方は委任状の提出をよろしくお願い申し上げます。

さて、そんな今日は聖書の中からルカによる福音書 24:13～35 を取り上げさせていただきました。失意の中、エマオへと向かう二人の弟子に、復活の主がそのお姿を現わされた場面です。今この二人の弟子は失意の中にあつたと申し上げましたが、それは彼らがイエス様の十字架、その死によってすっかり失望落胆していたからに他なりません。19節以降の箇所では二人は言っています。「ナザレのイエス……この方は、神と民全体の前で、行いにも言葉にも力のある預言者でした。……わたしたちは、あの方こそイスラエルを解放してくださると望みをかけていました。」「それなのに、わたしたちの祭司長たちや議員たちは、死刑にするために引き渡して、十字架につけてしまったのです。」これが、二人の弟子が悲嘆に暮れていた理由でした。

二人の弟子はイエス様に、「この人はきっと自分たちの指導者、王様になってローマ帝国の支配を打ち払ってくださる。そしてかつてのイスラエル王国のような王国を再び打ち建ててくださる。そして自分たちを繁栄に与らせてくださる」という、極めて

世俗的なメシアとしての期待をかけていたのです。二人にとってイエス様はナザレのイエス、力ある預言者、それ以上の何者でもありませんでした。イエス様御自身が考えておられたような、「苦難の僕」として人々の罪のために苦しみ、死んで蘇られる、そうしてすべての人々に神様との和解、永遠の命という救いを与えられる神の子、メシア、キリストでは決してなかったのです。

ただただ自分たちに都合の良い、世俗的な恵みを与えてくれると考えていたイエス様が十字架で殺されてしまった。二人の失望は察するに余りあります。二人は、今朝がた数人の女性たちがイエス様のお墓を見に行ったら、イエス様の御遺体が見当たらなかっただけでなく、天使が現れて「イエスは生きておられる」と告げたというニュースも聞きました。それで仲間の者が何人か墓へ行ってみたら、女性たちが言った通りでイエス様の御遺体がなかったという事実にも触れました。でもだからと言ってイエス様が復活されたのだという事実には思い至らず、ただただ混乱するばかり。二人は失望と悲しみのあまりエルサレムを飛び出して当てどもない旅に出かけ、とりあえずエルサレムの西北14kmばかりの所にあるエマオを目指しました。

そんな二人に復活されたイエス様が「近づいて来て、一緒に歩き始められ」るので。しかし、彼らはそれがイエス様だとまったく気づきません。「二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった」と記されています。イエス様がどういうメシアであられるかを理解する、その信仰の目が開かれていない状態では、イエス様が共に歩かれてもそれが復活の主であるとは認識できず、ただの旅人であるとしか思えなかったのです。

これは今でもたびたび繰り返されることではないでしょうか。今日ここに復活の主がそのお姿をお見せになったとしても、いったいどれだけの人がそれを復活の主として認めることができるでしょう。魂の目、信仰の目が開かれていなければ、私たちは復活の主を見ることはできません。

それでもイエス様は、「歩きながら、やり取りしているその話は何のことですか」、「どんなことですか」と二人の話を根気強く聞きます。「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち」と嘆かれても、「メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか」と、聖書全体にわたって御自分について書かれていることを丁寧に説明されました。たびたび聖書を聞いてもその真意を悟ることができない弟子たち、イエス様御自身から苦難と復活の予告を聞いていてもそれを信じるることができない弟子たち、彼らのために御自分が苦難を通して栄光に至るメシアであることを、聖書に基づいて説明されたのです。

これはこの時代の二人に対してのみ為されることではなく、あらゆる時代のキリスト者に対して為されていることでもあります。イエス様は昔と変わらず聖書の真意を指し示し、私たちがそれを悟りうるまで懇切丁寧に教え導いてくださるのです。

さて、それからイエス様は引き止める二人の弟子の求めに応じて家に入られました。それだけでなく、共に食卓に着き、パンを取って祝福し、裂いて彼らにお与えになりました。それは何という恵みでしょう。信仰の目が開かれない弟子たちに、復活の主は聖書を説き明かして下さっただけでなく、パンをも祝福して下さったのです。それはガリラヤ湖畔でイエス様がしばしば弟子たちのために行われたことでもありました。このいかにも特徴のある主の身振りを見て、愚かな鈍い弟子たちもこの旅人がイエス様御自身であることに気が付いたのです。彼らの信仰の目、魂の目が開かれて、復活の主を認めることができたのでした。するとイエス様のお姿は見えなくなりましたが、二人は互いに言い合います。「道で話しておられるとき、また聖書を説明して下さったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」と。そして二人は希望に溢れてエルサレムへと戻って行きました。

これが今日のお話ですが、私がこれを読んで素直に思わされたのは、「イエス様、面倒見が良いな」ということでした。失意と絶望の中にある二人の弟子たちと一緒に歩き、その話を懇切丁寧に聞き、その事柄の意味を聖書に基づいて丁寧に教え、「一緒に

お泊りください」という彼らの求めに応じて家に入り、食事を共にし、パンを裂いて与え、彼らの信仰の目、魂の目が開かれるまでを共にする。私はイエス様のこの一連の行動に、私たちが学ぶべきグリーフケアの基本を見て取るのです。

失意と絶望の中にある二人を、イエス様は決して急かしませんでした。真っ先に自分の結論を上から押しつけて、二人を無理やり立ち上がらせようとは為さらなかったのです。これは失意と絶望の中にある友に寄り添う時に、私たちがまず学ばなければならないことだと思います。私たちはともすれば性急に、「これはこうすればよいのだよ」とか、「こういうことなんだよ」とかいったみたいに、いきなり自分の考え、結論を押し付けるところから悲嘆の中にある人を立ち直らせようとしてはいいのでしょうか。しかし、それは相手の心、相手のペースを無視した無神経な行いになりかねません。

このことに関連して、クリスチャン・ジャーナリストのフィリップ・ヤンシーという人は、ある著書の中で、葬儀が多く、いつも傷んだ人に寄り添い、共に悲しみ、涙を流している「グリーフ・パスター(慰めの牧師)」と呼ばれている友人のこんな言葉を紹介してくれています。「悲しみについて一番大切なことは、神学校においてではなく、スキューバダイビングから学んだんだ。深海まで潜るスキューバダイビングには、深く潜れば潜るほど、ゆっくり浮上しなければいけないというルールがある。でも教会は、悲しみの底に沈んだ人をできるだけ早く回復させたいと思い、元気づけてしまうことがあるんだ。とにかく悲しむ期間を短く、早く笑顔になるように励ましてしまう。でも、それはよくないことなんだ。私の役割は、悲しんでいる人のところに行って、ただ一緒にいることなんだよ。そして、彼らが元気を取り戻す準備ができたとき、私もその人たちと共にゆっくりと浮上していくようにしているんだ。」こうした働きは、繊細で慈愛に満ちた心がなければできません。

そしてイエス様は今日の聖書個所で、こうした繊細で慈愛に満ちた心で二人の弟子に寄り添っておられます。決して急かすことなく、一緒に歩き、じっくりと話を聞い

て、丁寧に分かるように聖書を説明し、求めに応じて旅舎に入り、食事を共にし、パンを裂いて与え、二人の信仰の目、魂の目が開けるまで、彼らが失意と絶望の底からゆっくりと浮上してくるまでを徹底して寄り添われました。

私も神様と人に仕えるキリスト者として、また一人の牧会者として、イエス様のこの姿勢に倣いたいと思います。こうした繊細で慈愛に満ちた心で寄り添うことを大切にしたいと思います。もちろん私はイエス様ではないので、きっと起きてしまった事柄の意味、それを相手のペースに合わせてですが、聖書に照らして一からうまく説明していくというようなことはできないでしょう。「なぜ」という問いに、おそらく私は無力です。しかしそれでもイエス様の心を持って、スキューバダイバーのように悲しみに沈む人に寄り添っていきたくて願います。きっとそこに復活の主も共にいてくださることでしょう。信仰の目、魂の目、それはなぜこんなことが起こったのか、それは分からないけれども、それでもこの先に必ず希望が備えられていることを信仰によって見通す目です。その目を復活の主が開いてくださるまで、私も共に寄り添いたく願います。

最後にコリントの信徒への手紙二 1:3～4 に記されているパウロの言葉をご紹介します。「わたしたちの主イエス・キリストの父である神、慈愛に満ちた父、慰めを豊かにくださる神がほめたたえられますように。神は、あらゆる苦難に際してわたしたちを慰めてくださるので、わたしたちも神からいただくこの慰めによって、あらゆる苦難の中にある人々を慰めることができます。」

私たちが生きているこの世界は不完全であり、私たち人間には「なぜ」という問いに答えを出すことができない理不尽なこともたくさん起こります。しかし、神様は善であり、愛の御方であられることを私たちは信じています。どのような苦難の中にも神様が共にいて、私たちを根底から背負い、支え、愛してくださっていることを信じています。パウロは、先程紹介したコリントの信徒への手紙二 1:3～4 で言いました。私たちが神様からいただいたこの慈愛、慰めをそのまま人々の所へ持って行きなさい

と。そのパウロの勧めに私たちは従う群れでありたいと願います。悲嘆の中にある人を決して急かさず、イエス様のように繊細な心で、またスキューバダイバーのように寄り添っていきましょう。そして痛みも悲しみもたくさんあるこの世界で、神様の愛を光り輝かせていきたいと願います。

祈りましょう。 ——以下、祈祷——